

所要所で殴るける拷問の残虐行為をくぐり抜けてきた経過は言語に絶する苦難の道のりであった。

神代氏は妻と三十一人の公社家族を引率してこの鎮南浦から新京の公社に着いたときは、まるで凱旋將軍のように感謝され命の恩人と言われた。

学職常職の豊かさの神代氏は対人関係の要領のよさ、機転をきかすことのできる天才である。こういう人を得たので救出できたのである。ただ、ようやく妻と子と三人無事に故郷佐賀の親もとに引き揚げたその喜びも束の間、一人っ子の愛児が肺炎に冒されて一夜にしてこの世を去ったのが今もって無念であると涙を流していた。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 古之助)

第一次武装試験移民の妻としての

引揚げの記

長野県 永井 かほる

渡満前

私は、長野県小県郡依田村（現在丸子町）の農家に、二男五女の末っ子として、明治四十四年七月二十九日に生まれました。

主人は、同村で明治四十二年十一月二十八日に、五男二女の長男として生まれ、昭和七年に満州に渡っておりました。

「女子青年団の方々は、公会堂へお集まりください」と村の女子青年のいる家々に伝えられたのは、昭和十一年四月のことでした。

この村から国策により、第一次武装試験移民として満州で生活している永井 昶しほる（後の私の主人）たちの日常生活の様子を小倉幸男氏が、家族招致のため、内

地に来られ、いろいろ説明してくださいました。

小倉氏は、翌日、年頃の娘のいる家庭を回っており、我が家にも昶の親戚の人を伴って訪れました。小倉氏は、私の両親はじめ家族に家族招致の話をされました。

私は驚き、何日間か考えました。国策でもあり、村内の人でもあり、それに私は五女、姉は近くに嫁いでおり、次兄も近くにいるので、私一人ぐらいいは、遠くへ行ってもと思いい決心し、両親、兄姉に承諾を求めました。両親は、顔見知りの人であることから「長兄は、許してくれ、両親がいなかったら遠くへ嫁がせることはできないが、両親がいて親が許すのなら」と言っ許してくれました。慌ただしく、その月の内に、仲人を立て、主人となるべき昶はもちろん不在ですが、両親、妹たちのいる永井家に歩いて嫁入りいたしました。嫁ぎ先で一泊した翌日、いよいよ出発です。部落の方々や親戚の方々が公会堂に集まり、見送ってくださいました。私が二十六歳のときでした。

最初に長野市の県庁に行きました。小倉さん、田中さん、武田さん、小林さんと私、そして佳木斯で歯科

医をしている市村さんの六人の花嫁です。「長野屯は、全員そろいました」と小倉氏は報告いたしました。こうして、大陸の花嫁としての第一歩が始まったのです。渡満と外地の生活

新潟港を出発し朝鮮の釜山に着きました。このとき、私は生まれて初めて船に乗りました。いよいよ大陸!! 松花江を船で渡り、佳木斯に行きました。長い旅でした。主人たちが迎えに来ており船が到着すると、船内に入って来ましたが、誰が誰の主人が分からないような状態でした。私は、村内の人で顔見知りでしたので分かりました。

弥栄峠を越えて永豊鎮に着き、長野屯に入り共同結婚式をしていただきました。家も一棟二軒で建てられており、私たちは石井さんと一緒の棟でした。長野屯は、四組に分かれていて私たちは二組一緒でした。そこで組ごとに共同作業でした。

畑仕事に行きましたが、余りに広大な土地のため、道路に出るまでの間が遠く、また、家と畑の間もかなり遠かったため、夕方、早めに、「早く家に帰ろう!!」

との掛け声に、こんなに早く帰ってもよいのかと内心思いましたが、仕事をやめて、帰宅すると、ちょうどよい時間になっていました。夏は、ブヨが多く、布で袋を作り、目の部分に穴をあけて、頭からスッポリかぶり作業をしました。

その後、いつごろからか忘れましたが、長野屯は個人作業になりました。水田だけは、共同作業でした。私たちは石井さん家族と、農作業、炊事、食事は一緒にしておりました。隣に小屋を建て、二家族の満人を雇い、夏は農作業、冬は山で伐採、運搬、家畜の世話などをし、満人の子供は、綿羊の放牧をいたしました。それら作業のすべてを、石井氏の指示の下に行われておりました。

裏の小高い丘の斜面に養蜂をしており、それは、主人が管理しておりました。分蜂の時期、主人が公務や他の仕事で忙しいときは、私が網帽子、手袋で身仕度をして手伝いました。女王蜂が二匹になると分蜂し、巣箱の蜂の出入口に、固まりとなって群がっています。その中に女王蜂がいますので、女王蜂が表面に出て来

るのを待つて、汁さじですくって新しい巣箱に入れると、働き蜂は、女王蜂にひかれて巣箱に入って行きます。一回目は、巣箱の近くにいますが、二回目は、遠くに逃げて行ってしまいますので、巣口にいるときにチャンスです。蜂蜜は、農産加工場に出荷してました。

湿地を開墾し、水田を作りました。長野屯は、共同作業でしたので、みんなで、種モミを発芽させ、バラ蒔き作業をいたしました。その水田に肥料がなくなるので、翌年は、新たな湿地を開墾し、水田を作りました。その米で新潟屯の吉原さんに酒造りをしていただきました。石井さんと主人の父（昭和十四年五月に渡満し同居）と主人は、その酒で晩酌するのが楽しみでした。軍にも納めていたとのこと、また、茨城の鈴木氏は、野ぶどうからぶどう酒を造って販売していたそうです。大豆、味噌、醤油を造ってもらい、お陰様で、酒粕や味噌で漬け物もたくさん作ることができました。

種畜牧場に主人と共に二年間ほど勉強に行きました。場主であり獣医の堀北先生は、何でもできる先生で、

ハム、ソーセージ、バター、カルピスの加工から、羊毛加工、ホームスパン、機織りもでき、さらに中国語、ロシア語の語学にも堪能な人でした。私は羊毛加工を習いました。そこでは、先生はじめ、菅原さん、田中さん、伊藤さん御家族に大変お世話になりました。

長野屯に帰り、上田市出身の田中さんがホームスパン用の機織機を購入してくださいました。私たち二組の筒井さん宅は、御家族で漱江義勇隊指導員として行っており、留守宅になっていたため、機織機は、そこに備え付けられました。私は、母と洋服生地ホームスパンを織りました。娘時代、生糸から染色をし、上田糸を織っておりましたので、その技術が役に立ちました。羊毛は洗毛し、カードで整毛をし、紡毛機にて毛糸を作り、三本合わせると編物用の毛糸になりました。原毛の色が白・黒・茶の三色あり、用途に応じて、白、黒の混合を作り、割合を変えると濃、淡のネズミ色になりました。編物ができる何人かの婦人に、編み方を教えていただき、靴下、セーター、手袋、帽子、マフラーを編みました。編みながら、編み方のコツや、

工夫したことなどが話題となり、楽しく学べました。

父は、孫の世話、ニワトリの飼育、野菜の手入れなどをしてくれましたので、私は大変助かりました。兵隊の野営が、私たち二家族の近くに天幕を張りました。父は、麦飯が食べたいと言って兵舎へお米を持って行き、麦飯をもらってきて大喜びで食べていました。当時満州では白米ばかり食べており、父は祖国の麦飯の味が懐かしかったようです。

昭和十六年一月十三日、主人の弟四男徳雄（二十五歳）が中華民国河北省晋県克兒村付近にて戦死いたしました。依田村で、もう一人戦死された方がおられましたので、合同の村葬をしていただくことになり、両親と主人は内地に一時帰りました。村葬が終わって再び満州に戻って来た主人より、「内地は、皆、配給制で物資が乏しく、村葬のために支給された一升の天ぷら用の油で、初七日まで済ませたが、こちらから持つて行けばよかった」と言っておりました。

満州の深い川には、魚がたくさんいましたし、平野には、山菜、野草、茸などが豊富で採りに行きました。

見渡す限り一面に、短い夏の期間に、アツモリ草、福寿草、スズラン、シヤクヤク、姫百合、オミナエシなどが競うように次々と咲き、見事な景観でした。こんもりとした草の中には、キジの卵があり、豊かな自然の恵みがいっぱいでした。

雇い人の満人に、日本の田舎料理を届けたり、また、ぎょうざなどの中華料理を時々頂いたりいたしました。そして、近所の満人の結婚式にも招待されたりし、思ひ出深い生活でした。

満州での生活も軌道に乗り始め、視察団も訪れるようになりました。視察団の大部分は、新潟屯と長野屯の間にある弥栄神社に、お参りをして長野屯にこられました。

昭和十七年十一月に、閑院宮春仁殿下が視察にこられました。主人の妹（松江）は、役場に勤めており、他の職員の方々と一緒に写真をとりました。引揚げ後、この写真を持ち帰っている人は、主人の妹以外、だれもいなく、「弥栄村史」発刊に当たり、載せていただきました。

また、こんなエピソードもありました。大妻学園園長コタカ先生と生徒二十人が視察にこられ、四組に宿泊されました。先生は、内地で、満州の「トウナス」はおいしいと聞いてこられたようで、「トウナスが食べたい」と申されました。ところが「トウナス」が分からず、「茄子」を、夜、懐中電灯をつけて取りに行き、茄子料理をいろいろ作り、お出しいたしました。翌日、帰られるときに、「トウナスが食べたかった」と申されましたので、よくよくお聞きいたしましたところ、「南瓜」であつたと分かり、食べていただくことができなかつた申し訳なさと、残念さが残り、笑うに笑えない話となりました。

このように、農業、畜産、養蜂、加工、織物などの内容や技術が段々と向上すると共に生活が安定してきました。しかし、戦争が始まり、せっかく、築き上げたすべての物を捨てて、満州を後にしなければならぬほど、戦局は悪化していったのです。

満州引揚げから内地到着まで

昭和十九年から、戦争の話は聞こえてきました。私

たち主婦は、満人に知られないように話をしていました。負けたことのない日本人は勝てると思っていました。戦争は、ますます大きくなりそうな気配であり、何の情報施設もないため、本部に行く度に情報を持ち帰りました。

私たちが、長野屯にもいよいよ召集令状第一号が、主人の弟、吉久（五男）にきました。竜爪畜産学校を三月に卒業して、間もない四月のことでした。次々と団員に召集令状がきて、働き盛りの男は一人も残らない我が長野屯となりました。主婦と子供、六十歳過ぎの年老いた男女、それぞれ二人だけしか残りませんでした。家畜の世話や田畑の仕事は雇っていた満人と共にいたしました。

どこの家の雇い人も、責任を持って一生懸命働いてくださいました。「主人がいなくても何でもしますから、言ってください」と言ってくれるので、心強く思いました。

八月十一日夜（長野に原爆が投下された日）、突然、「夜明けまでに、弥栄駅に集合!!」との引揚げ伝達を

受け、身の回り品と数日分の食料、塩、水まで、一晩中かかって用意いたしました。主人の弟（四男徳雄、昭和十六年一月戦死）と我が子長女公子（弥栄長野屯にて病死）の二つの位牌を病床の母（東安省密山県の長野村にいる三男の所に行き、病気になり弥栄村に帰り療養していた）が背負い、父はその母を背負いました。どの家でも雇い人である満人に、馬車を用意させ、（早く満人に知らせて、もしも危険があつてはと思）出発直前に知らせ、弥栄駅まで運ばせました。家具、食料、家畜は全部、雇い人に引き渡しました。満人の主婦や子供も別れを惜しんで見送ってくれました。「さらば、長野屯よ!!」馬車は列を作って行き、弥栄神社の前で、馬車の上からお祈りをし、新潟屯を通過、本部を過ぎて弥栄駅に到着。犬もついてきたので飼い主から離れない。駅にはあちこちの屯からもやって来ていました。満人も大勢来ており、涙を流し、また、早く戻って来るようにと口々に言つて、顔をおおって泣いていました。

村長、団長は弥栄神社、忠霊殿にお祈りをしてきた

とのこと、汽車はなかなかこなくて、朝早くから夕方近くまで待つて、ようやく駅に入ってきましたが、客車、貨車、無蓋車とあり、長野屯の人たちは無蓋車でした。機関車が四両ぐらい連結しており、後方の車両は小さくて見えないほどに汽車は連結していました。

佳木斯に着きましたが、日本人は駅員ぐらいしか見えませんでした。後で聞いたところによると、兵隊、軍属、市民は皆、立ち去った後だったとか…。

空が煙で見えないくらいに、焼き払われていました。私たちには、行く先もわからず、「親と子供が別れさせられる」とか、「山に行くのだ」とか、デマが飛んだ。「子供と別れさせられるなら、ここに残った方がいい」と口口にささやいた。

夕方汽車は動き出しました。駅と駅の間は長く、乗り残された人々を次々と駅で拾い、人々は、大きな荷物を持って乗り込んできます。「命が大切か、荷物が大切か!!」などの声も出ていました。

黄色く刈り取られた麦の山々、青々と茂った大豆、トウモロコシ畑を後にして、汽車は走る。持ち出して

きた食物は減る一方…。雨が降ってきた。紐のような雨は無蓋車に容赦なく叩きつける。夏の夜でも冬のように寒く、皆、濡れ鼠であった。汽車はのろのろと走る。子供、年寄りなど、下に敷いていた毛布を車両の縁からとって頭から覆い、雨を凌ぐ。八月十三日、日中、南又駅に着きました。雨はようやく止み、車体の高い（満州の汽車は、車体が高かった）汽車から子供を手探りで降ろす。私たち母親は、張り切った声もすっかり枯れてしまった。濡れた着物は、絞るほどであった。汽車の下に入って持ち出してきた衣服を子供に着替えさせていた。すると、「汽車が動くから下から出ろ!!」との声に、また、手探りで子供を汽車に乗せた。南又駅を出発し、衣服は着たまま乾かすよりほかなかった。昼間は、やはり夏だ、蒸し風呂のようであり、子供たちは大人の間に入り、一層暑かったことでしょう。

我が長野屯分教所の高橋先生の子供さんが最初の犠牲者となり、機関車の中で火葬いたしました。生きた心地なし!! 御冥福をお祈りいたしました。汽車は山

中を走る。途中、私たちと反対方向に行く汽車には、義勇軍か奉仕隊の男女が大勢乗っていました。私たちは「万歳!! 万歳!!」で見送ってあげましたが、その汽車は走り過ぎて行きました。どこへ行ったのでしょうか。汽車が止まり、お米を持って来た人もいて、木や草を拾い集め、線路脇で飯盒などで煮ておりましたが、煮え切らないうちに汽車が動き出すので急いで乗り、また、次に止まった所でそれを煮たりしていました。しばらく走った後に止まったがそこで、終戦を知りました。では、また、弥栄村に帰れるのかと思いましたが、汽車はまた動き出し、緩化駅に着きました。そこから長い時間歩きました。

病人の子供二人を背負い、手には荷物、前の人、後の人、横の人、皆、同じ姿です。前に出るのか、横に行くのか、分からぬように歩き、今晚にも食さなければならぬ食物も捨てて行く行列、本当に長いこと歩きました。ようやく飛行場の格納庫に入りました。コンクリートの上に毛布を敷いて、村、脱出以来初めて足を伸ばすことができました。父母には毛布、私は二

人の子供の足を胸で暖めて、一夜を明かしました。天の恵みと言うのか、団員の我が長野屯の人たち六人が、現地解除となり尋ねて来てくださいました。石井氏、竹花氏、塩澤氏、井沢氏、塩原氏、原田氏です。

弥栄村は、もう立ち去ったと聞き、こころ当たりではないかと思ひ尋ねたとのこと、この有様を見て、これは大変だと近所の製材所から材木や板、刈り草など、肩でかついで運び床を作ってくださいました。北満国境からも来ており、三千人の集団生活です。子供の敵、麻疹はしかが流行し、夜、ロソクの光のある場所は、今息をひきとった方がいた所や、息も絶え絶えの人を見守るそんな光でありました。また、お産もありました。日がたつにつれ死者や病人が続出し、しまいには、一つの柩に四体ぐらゐも納め、弥栄村の住職本多先生の奥様や弟さんに、お経を上げていただき、男の団員に野辺送りをしてもらいました。医務室を設け、弥栄病院から持ち出してきてくださった薬などで、保健婦(宇賀神)さんたちは大活躍でした。

緩化到着後、みんなを思い、団長は単独で奉天へ物

資を求めに行きましたが、そのまま戻ってきませんでした。途中、襲撃死された由、御冥福をお祈りいたしました。

約一カ月間飛行場内で生活をした後、駅に向かいました。今度は、貨車に乗りましたが、夜は動かず、夜明けを待つて動き出しましたが、長野屯全員一室のため、皆、立膝、子供は膝の上にのせました。九月半ば、寒さが増してきました。やつと三標樹駅に着きました。ここで長野屯の子供四人が亡くなりました。我が子長男篤行（五歳）もその一人でした。十四日に病死し、構内の壕に埋葬していただきました。汽車は発車しても走る時間よりも停車時間の方が長く、朝鮮人や満人が車内に物取りに来ては持ち去り、次の夜も窓や錠を破つて入つて来る。あるのは命だけであり、皆、息を殺し身を縮めておりました。遺髪、遺爪の入った包みを持ち去られる人もいました。母用に、持つてきた便器が大変役に立ち、人にも貸したりいたしました。死亡する子供が多くなり、鉄橋から川に葬る人や死体を背負っている人もいました。

奉天駅に到着。ここで、堀北先生は、ソ連軍に連れ去られたまま、戻つて来ませんでした。ロシア語ができたので、スバイと見られたとのこと。男の団員は、手拭いで姉さんかぶりをし、女の上着とモンペ姿になり、また、娘や若妻は顔を汚し、髪を乱しております。途中、一日くらい汽車は動きませんでした。ヤカンを持ち出してきたので、石井さんに、機関車から水をくんでもらいました。ようやく、大連に向かい発車しました。途中、止まる駅には、満人が食物を売りにきており、トウモロコシ粉で作った野菜入りの万頭を買つて食べた。その甘さは、言い知れぬほどでした。内地に直行できると思う気持ちも手伝つて、元氣回復!! 汽車は走つた。反対方向に行く汽車には荷物一杯積まれ、学校の机まであり、ソ連に運ぶとか…。

大人の精神病も出始めました。どこの駅か忘れましたが、塩原貞子さんがいなくなり、皆、大さわざし、八方手を尽くしましたが分からず、駅員に頼んで汽車は出発いたしました。一汽車遅れて、塩原さんが乗つてきました。やはり、ちよつと、気持ちが疲れたよう

でした。駅の構内で御飯を炊いて、おにぎりにして子供たちに分配しました。

九月二十四日、大連に着きました。構内の日だまりで皆、一休みをし、行き先を待ちました。

大連実業学校難民収容所に入りました。一家族、一畳半から二畳ぐらいのスペースの中で寝食し、夜になれば、ソ連人、満人などの物取りや人さらいが来て、みんなで金物や戸などをたたき、「ワァー!!ワァー!!」と大声を上げ騒ぎました。そんなとき、突然、団員の皆様が帰ってこられました。長野屯は、管沢氏、小林氏がみえ、私たちは、もう内地に帰ったような嬉しさでした。大連在住の日本人の方は、毎日のように、見舞いに来てくださる方や、物質を運んでくださる方々の支えをいただきました。在住日本人の方々は、さぞかし大変なことであつたろうと思います。今でも感謝いっぱいであります。

私は、人が焚火をした残り火を利用し、弁当箱で、味噌汁を作り両親に食べてもらつたり、父が梅漬けが食べたいと言いますので、梅漬けを買ってきて食べて

もらったこともありました。

満人は、日本人の子供は利口だからと言って、一日に何人も、子供をもらいに来ました。

寒さは増し、大人も子供も、次々と死んでいきます。皆、気が狂いそうでした。何が何でも全員帰国しなければと願いました。

しかし、その願いはむなしく、我が家では次男旭雅三歳（昭和二十年九月二十六日）と母、いわを六十一歳（昭和二十年十月二十五日）、そして父、作太郎七十七歳（昭和二十一年一月二十四日）が大連実業学校内で相次いで亡くなり、轉山麓に建てられている学校の前の小高い位置に、三人埋葬していただきました。度々、菓子、花を買つてお供えに行きました。

長野屯は、男の方々の計らいで共同炊事をし、御馳走になりましたので、体も少し回復いたしました。ソ連の命令があるまで、いつ帰国できるのか分からないので、皆、働きに出掛けました。二人の子供と一緒に背負つて来た人たちは、子供全部を亡くし、一人身となつてしまい、女子青年団の姿で、大連埠頭に大豆の

詰め替え、袋の修理など、毎日、行列をなして出掛けました。満人も働いていました。ソ連人が時々見回りに来ますので、満人が教えてくれました。その他、大連在住日本人の家に、お産の手伝い、病人の世話、炊事、洗濯、お店の立売などのお手伝いに行きました。

満人の家や、白系ロシア人の家にも行きました。白系ロシア人の家では、「日本人は「ごはん」だ」と言つて、私たちのために、御飯を炊いてくれました。本當に有り難く思いました。どこへ行つても、露店商でいっぱいでした。私たち難民は、その裏にまわつて、野菜の葉・茎や魚の切りクズを拾い、煮ておいしく食べました。ところが魚を煮て食べた人の中で、体にシビレがきた人が一人出ましたので、魚は止めました。皆、百姓で鍛えた体、本當に有り難く感じました。大人が働きに出ている間、子供たちは留守番をしておりました。また、弥栄小学校の新見勢市先生が、仕事の合い間を見て、勉強を教えてくださいました。

お正月には、弥栄全員の人にお餅や鯖を頂きました。これはどこからくださったのでしょうか…。

一軒で三人以上死亡者が出た家族は、遺族が集まり、何百体もの、大供養慰霊を、大勢の和尚様でしていただきました。大連の方々や、工藤村長の弔辞があり、今ならテープに納められたのと思います。

働きに行った日本人の家では、衣類などをくださいましたので、お陰様で冬籠りもできました。一年二カ月の大連生活も終わり、待ちに待った帰国の報を聞き、万頭などを買つて、お墓参りに行きました。火葬であったら遺骨を持ち帰ることができましたが、残してあった遺髪や遺爪を持つて、昭和二十一年十二月二日、大連港を後にして、十二月八日佐世保港に入り、小舟で上陸いたしました。上田市の気候の十月下旬の陽気でした。

佐世保に上陸して真っ先に目に止まったのは、「引揚者の皆様、御苦労様でした」と書かれた看板でした。嬉しくて涙が頬をつたいました。

手続を済ませ、昭和二十一年十二月十六日、長野市に到着いたしました。県庁の方々や婦人会の皆様のお迎えや接待を受け、その日は、そこに宿泊いたしましたし

た。翌日、善光寺で六十柱の霊の大供養をしていただ
き、十七日午後、長野市より帰途に着きました。

汽車の窓から見れば、山が待っていた。町が待って
いた。家が待っていた。見えるものすべてが待ってい
た。中丸子駅に着いたとき、主人の弟次男愷雅と三男
の弟嫁てる子が、先に帰国しており、親戚の方々と共に
迎えに出ておりました。「ああ、よかつたナー」と
嬉し泣きました。まだ主人の弟五男吉久と主人
人が帰っておりませんでした。

渡満のとき、家屋、田畑を親戚の人に預けてゆきま
したので、返していただき、満州から引揚げ途中亡く
なったり、戦死した家族の位牌、遺爪、遺髪を持って
いたので、「これを、内地に帰り、家の敷居をまたぐ
までは死ねない!!」と生きる支えのようにしてきた私
は、役目を果たせたような安堵感を覚えました。

日本に帰って来たものの、食べる物は何も無く、田
畑の畦に行っても、食べられる野草は、全部食べ尽く
され、野甘草の根まで掘り取られている状況に、内地
に帰ったら、何か食べられるだろうと希望を持ってい

た私は、がっかりいたしました。そうした中で、村の
方々や親戚の方々に、食料や衣類、家具など、生活に
必要な物を差し入れていただき、大変助かりました。
写真なども、折にふれて手紙と一緒に親戚に送ってあ
りましたので、「写真などは、持って帰れなかっただ
ろうから」と言って、持って来てくれました。

主人が帰って来るまでの一年間ほど、ちようど、そ
の頃、農閑期でもありましたので、主人の弟たちに、
家のことを頼み、私は峠を隔てた実姉の嫁ぎ先に泊ま
り込みで働きに行きました。冬の間は、野菜、穀物な
ど、収穫物の後始末や機織り、春からは、農作業、養
蚕の手伝いをいたしました。食をかせぎ、物資や衣類、
そしてお金をもらい、生活することができました。

昭和二十二年十月に主人の弟五男吉久が帰り、十二
月に主人が帰ってきましたので、私は姉の家から、我
が家に戻りました。

昭和二十三年と二十五年にはそれぞれ娘が生まれ、
私たちの生活にも、生きる張り合いができました。娘
二人は結婚し、それぞれ二人の子持ちとなり、盆、正

月は、四人の孫がはしゃぎ回り、にぎやかです。

娘たちが思春期を迎えたころ、丸子町にガスが敷かれ、私は子供たちの学資の足しにと思い、その工事の交通整理に行ったりしました。その後、歩いて三十分ぐらいの所にできた軽電機の会社に勤務し、約十年近くお世話になりました。そのころは、野良仕事と掛け持ちで働き忙しい日々でした。お陰様で、娘たちも無事高校を卒業して、社会人として送り出すことができました。

主人は、羊毛刈りにバイクで、上田、小泉佐久方面に、早朝より出掛けて行きました。集めた原毛を北海道の工場に送り、注文に応じて、毛糸や生地加工して送ってもらい販売しておりました。しかし、その仕事もうまくいかず失敗してしまいました。大きな借金を作ってしまった、借金返済のため、遠く東京や大阪まで出稼ぎに行きました。好きなお酒も控え目にして、数年で借金を返済することができました。この借金返済で自信がつき、くず屋根だった家を新築することにいたし、その資金稼ぎに励みました。お陰様で近所の

大工さんをお願いし建てることができました。高度経済成長時代を迎える数年前であり、まだ物価の安いころでしたので、建てることのできたのだと思います。

元気で丈夫だった主人も平成三年七月に病気のため、開拓に賭けた命の今あるは、心拓ひらけと神は言うなり」と詠み、波瀾万丈の人生の幕を閉じました。

今、私は、満州で亡くなった家族や主人に見守られ、畑仕事をしながら、丈夫で一人静かに過ごしております。

【執筆者の横顔】

筆者は長野県、現在の丸子町農家で二男五女の末っ子で、明治四十四年生まれの八十三歳である。

永井昶氏は丸子町で農家五男二女の長男、明治四十二年生まれである。

昶氏は昭和七年満州弥栄移民団に入植し成績優秀な男である。

昭和十一年弥栄移民団の小倉幸男氏が帰国のついでに郡山公会堂で女子青年団に「満州移民団経営と生活

事情」を講演された際、その聴講者にかほるさんがおられた。

当時、小倉氏は、永井昶氏の親戚の人を伴って、かほるさん宅を訪ねて、両親とかほるさんに、昶氏の人となりを話し、かほるさんとの結婚へ所望となった。かほるさんは二十六歳だった。

渡満してから、弥栄移民団あげて現地で結婚式が挙げられた夫婦である。

弥栄の営農は既に軌道にのり、昭和十七年には閑院宮春仁殿下がお見えになった。

昭和十九年に入ると主人に召集令状がくる。次々と応召されていく。ついに二十年八月九日、ソ連軍の襲撃をうけたさ中、弥栄駅前に集合命令で、我先にと列車に乗って南下し始め、支離滅裂の状況だった。南支駅へ、綏化、三棵樹へと、降ろされたり、乗せられたり歩いたりしている間に、病人がでる。お産をする人がいる。また、亡くなった人の葬式もする。盗賊に襲われて暴行にあう。老人は歩けなくなり座ったまま動かない。阿鼻叫喚のなか、我が子の手を引きながら歩

行し続けるかほるさんの姿がある。せっかく大連まで南下したのに引揚船がいつくるか分からない。大連での滞留。その間、二十年九月、次男三歳で死亡、十月に母が死亡、二十一年一月に父が死亡、大連小学校の山中に三人を埋葬、悲しみ高まり涙も乾くといった思いである。

二十一年十二月二日ようやく大連港から乗船、八日佐世保に上陸、十六日故郷長野の自宅に引き揚げて、位牌、遺髪、遺爪を届けなければ敷居をまたぐことはできない執念で、仏壇に安置した悲しい引揚げである。

昭和二十二年十二月に、昼夜にわたり帰還を祈願し続けた昶氏が骨と皮だけで生きて引き揚げてこられて、家の中は満堂明るくなり、かほるさんも生甲斐を感じた。昶氏は満州開拓で習い覚えた技術と営業で長野から北海道まで手広く羊毛の集荷、加工、販売へと奔走し、数年前に新宅を建築して居住、満州生活の悲喜交々を語りあっていたが、老齢と病を患いながらも「開拓に賭けた命の今あるは心拓けと神は言うなり」と詠じて、かほる夫人に渡し、平成三年八十一歳で逝かれた。

永井夫婦の契りは、居住の遠近を問わず、心は一つになって夫婦相和しの模範である。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

臨月の妻が

愛児の遺骨を胸に引揚げ

新潟県 近 庄 次

大志をいだいて

「青年よ征け大陸へ」のポスターを見た私は、昭和十三年度の徴兵検査に十九歳で志願した。幸い甲種合格になったので検査官に、満州部隊に行きたい旨を申告した。同年十二月末、綏芬河^{すいふんが}東部第二国境守備隊と決まり、翌十四年二月二十八日に広島へ集合するようにと通知がきた。広島を出て約一週間後に目的地綏芬河に着いた。このようなわけで第一の目的を達した。中隊には三年兵がいた。したがって三年間の辛抱であ

る。たまたま同年六月ころ、北部国境線でノモンハン事件が勃発して数カ月後、日本軍大敗で戦闘は停戦となった。そこで日本から松岡全權大使がモスクワに派遣されて、ここに日ソ不可侵条約が締結されたのである。

昭和十六年秋ころ、私ども三年兵は来年の春には満期除隊だとお互いに喜びあい、一日千秋の思いであったが、十二月八日、大東亜戦争が始まった。

これではとても除隊の見込みがなくなつたと、みんな諦めてしまった。

翌十七年二月早々、「現地除隊を希望する者は申告せよ」という命令が出たので、我々三年兵は飛び上がつて喜んだ。私はこれで第二の目的を達することができた。

横道河子鉄道警護訓練所勤務

数日後私の中隊から十一人、その他各中隊からの現地除隊者が就職を求めて集合した。就職先は、満鉄をはじめ警察関係電気通信その他多様であつた。私は鉄道警護隊に就職した。そして同年十二月、奉天中央鉄